

【論文】

『怪談』の中のハーン

池田 志郎

はじめに

ラフカディオ・ハーン（1850-1904）の『怪談』（Kwaidan 1904）は、日本のみならず海外でもよく読まれている。また、日本では、中学校や高校の英語教科書にも「ムジナ」や「雪女」などが掲載されている。しかし、そもそも、なぜハーンは日本に伝わる昔話や説話などから、それらの物語を選んで『怪談』を作り上げたのだろうか。そこにはハーンを引き付けた何かがあったはずである。『怪談』の話には種本があることは本人も明らかにしているが、当然のことながらそれは単なる翻訳ではなく、ハーンなりの理解や解釈が入ったものである。それらの物語を読んでみると、孤独感、孤立感、疎外感など「ひとりであること」からくる感情が頻繁に見て取れる。そこで、本論考では、『怪談』の中から「雪女」と「耳なし芳一」を取り上げ、登場人物たちの「ひとりであること」がハーンにとってどのような意味を持っているのかについて考えてみたい。

1. 「雪女」について

「雪女」は、人間と人間でないものが婚姻するという異類婚姻譚である。雪女がミノキチに恋をし、結婚して幸せに生活を送っていたが、ミノキチの秘密の暴露によって、幸せな生活が崩壊してしまうというものである。これを雪女の恋愛物語と見なすと、非常に切ない物語であるとも言える。伝統的な日本人の情念の世界では、雪女という異界の登場人物にさえも人間的な感情を付与し、普通の人間と同一視してしまう。しかし、この二人の結婚はうまくいかない。誰に責任があるというのでもなく、もちろん、ミノキチの所為でもなく、雪女とミノキチの生活は破綻すべく宿命づけられていたのである。

では、なぜ破綻する運命にあるのか。異類婚姻というのはそもそも成立してはならないものである。その根底には、人間がそうでないものと結ばれてはならないという不文律が存在するからだと考えられる。説話などは人間中心であることが多く、人間の感情を守るためには、他の種と混じることは許されない。そして、当人同士は愛し合っているにもかかわらず、決して結ばれてはならない関係、その悲劇性にこそ日本人は美を感じたのである。それは、ハーンが関心を持っていたエドガー・アラン・ポーの美学にも通じるものがある。人間は人間の領域を超えてはならない、その領域を超えた瞬間に、人間は人間ではなくなり、霊の世界に生きなければならないとなると考えられる。すると、読者（聞き手）の感情は主観から客観寄りになる。

読者（聞き手）の感情を主観的なままにしておくためには、ミノキチは雪女との約束を破らなければならないと言えよう。この約束を破るという行為自体が人間であることの証でもある。そしてそのことに、読者さえも安心感を覚える仕組みになっている。なぜならば、人間であるミノキチが救われることになるからである。霊である雪女は、家族との幸せを失うという罰を受け、人間界から消えていなくならなければならない。霊の持つ情感に共感できるけれども、最終的にはやはり人間が救われなければならない、人間が物語の中心でなければならないのである。

もし仮に、ミノキチが霊と交わることで人間でなくなったとしたら、どのようなことが起こることが予想されるだろうか。最終的に、ミノキチが人間でなくなってしまうと、その途端にこの物語は全くの悪霊による恐怖物語になってしまうであろう。聞き手の心に訴えかける夫婦の情、親子の情という日本人に理解されやすい共感も半減するであろう。

この作品は次のように始まる。

武蔵の国のある村にモサクとミノキチという二人の樵がいた。この話のころモサクはもう老人で、見習のミノキチのほうはまだ 18 の若者だった。毎日、二人は一緒に村から 2 里ほど離れた林へ出かけた。途中には広い川があり、そこを船で渡らねばならない。その渡しには何度か橋が架けられたが、架けるたびに大水で流されてしまった。水嵩が増すと、普通の橋ではとてももたないのである。(80)

もちろん、この二人のうちの一人は若者でなければならない。厳しい寒さに耐え、生き残る生命力を持っていなければならないのである。18 歳という年齢も、美しい女性（雪女）と恋に落ちるのに最善の年齢である。また、二人が薪を採るために行く林は村から離れた場所にあり、しかも、広い川を船で渡らなければそこへは行けない。つまり、この広い川は林のある世界と人間の住む村のある世界とを分け隔てる境界の役割を担っている。人間の住めない世界、すなわち、何がいるかわからない世界と、人間の領域とを隔てているのである。そして、恒常的にふたつの世界をつなぐ橋はすぐに流されてしまうので、その両方の世界を行き来するには小さな船を利用するしかない。ある意味、このふたつの世界は小舟の往来による瞬間だけしかつながらないのである。

雪女が現れるのはもちろん何がいるかわからない世界の方である。二人の樵はその世界に取り残される。

モサクとミノキチはとある大変寒い夕方、帰り道にひどい吹雪に襲われた。二人は渡しのところまで来たが、渡守は船を向こう岸につないだままどこかへ行ってしまっていた。

とても泳いで渡れるような日ではない。小屋には火鉢はもちろん火を焚くような場所もなかった。広さわずか二畳敷の小屋で、戸がひとつあるきり、窓はない。モサクとミノキチは戸をしっかりと閉めると蓑をひっかぶったまま横に臥した。はじめのうちはさほど寒いとは感じなかった。吹雪はじきに止むだろうくらいに思っていた。(80)

船は向こう岸にあり、吹雪なので広い川を泳いで渡ることもできず、渡守の小屋で夜を過ごすしかない。雨風を凌ぐだけの小屋には火を焚く場所もないし、窓もない。つまり、この小屋は辛うじて人間の居住空間の形をとってはいるが、あくまでも仮の家に過ぎない。それは、こちら側の世界は人間が住んではいけない世界だからである。恒常的に住むことは許されない。

こちら側の世界にあるこの小屋は人間の自由に出来る訳ではない。あくまでも、こちら側の世界の恩情によってその存在を黙認されているに過ぎない。いつその恩恵がなくなるか分からないのである。だから、小屋の戸口はしっかりと閉められたにもかかわらず、雪女は自由に小屋に出入りができるのである。

ミノキチが雪女に気づく場面は次のように描かれている。

目を覚ましたのは顔にさらさらと雪が吹きつけたからである。知らぬ間に小屋の戸口が開け放たれている。そして、雪明りに照らされて、女が部屋にいるのが見えた――全身が白装束の女である。女はモサクの上にかがみこみ、息を吹きかけていた。息は白く光る煙のようだ。とその時、女は急にこちらへ向き直り、今度はミノキチの上にも身をかがめた。ミノキチは大声で叫ぼうとしたが、どうしたことか声にならない。だんだん低くかがみこんできて、白い女は顔がいまにも触れなんばかりになった。ミノキチは女がたいそう美しいと思った――目は恐ろしかったが。しばらく女はミノキチをじっと見つめていたが、ほほえんで、囁いた。「お前も同じ目に合わせてやろうと思ったが、なんだか不憫になった。お前はあんまり若いから。お前はかわいいから、今度は助けてあげる。しかし今晚のことは誰にも話してはいけない。たとえお母さんにでも言えば、ただではおかない。そうしたら命はないよ。いいか、わたしの言いつけをお忘れでないよ」(81)

この場面では、先述のように、初老のモサクは殺されるが、若い 18 才のミノキチは殺されない。物語の構成上からもミノキチを殺す訳にはいかないのは当然であるが、若いミノキチの感受性がこの物語の大きな役割を果たすからである。雪女の顔が近づいてくると(The white woman bent down over him, lower and lower, until her face almost touched him)、ミノキチは雪女を「たいそう美しい(very beautiful)」と思い、雪女の方も 18 歳のミノキチをしばらく見て、「あんまり若い(so young)」「かわいい(pretty)」と思う。

この場面で注目しなければならないのは、われわれ読者はこの白装束の女を「雪女」と認識しているのであるが、ミノキチはこの「全身白装束の女(a woman all in white)」を、雪女ではなく、「たいそう美しい女」と認識していることである。確かに、「目は恐ろしい(her eyes made him afraid)」と感じているが、あるいはその眼力によってこそである可能性が高いが、若いミノキチはこの「たいそう美しい女」に恋をしてしまう。恐怖の感情と恋愛の感情は、心拍数の増加という現象において共通する部分があり、これまでミノキチはこれほどまでに美しい女性に出会ったことがなく、一目惚れしてしまったのである。雪女がミノキチの上に身をかがめ、身動きできないミノキチに顔をだんだんと近づけ、息を吹きかけようと、いまにも触れそうになったときに、ミノキチはその美しさに惹かれてしまう。この場面は若い男女のラブシーンだと考えるのが妥当であろう。おそらく、若いミノキチにはこのような経験はこれまでになく、「たいそう美しい女」との疑似キスシーンはミノキチの心をときめかすに充分であったはずである。

また、雪女の最後の言いつけ「今晚のことは誰にも話してはいけない」にはどのような意味が見いだせるであろうか。もちろん、タブーを設定するということは、その時点でタブーが破られることが内包されていることは明らかである。しかし、同時に、雪女がミノキチに恐怖を植え付けることによって、自分のイメージを心の中に保持させようとしたとも言える。さらに、「いいか、わたしの言いつけをお忘れでないよ(Remember what I say!)」と念押しすることによって、生か死の二者択一を迫り、忘れようにも忘れられなくしたのである。ミノキチは、その恐怖とともに、雪女の美しさもまた忘れることができなくなってしまった。そして、そのうえで、ミノキチを生かしておくのであるが、それはもちろん将来の出会いを予定してのことである。

雪女とは孤独な存在で、ひとりで雪の中で生きている。その雪女が、言わば、孤独に耐え切れずに、ミノキチに恋をするのである。そして、冷酷な雪女としてひとりで生き続けるか、恋愛という温かい感情を大切にするのかという選択の中で、愛情というきわめて人間的な感情のほうを選んでしまう。しかも、少なくともミノキチを初めて見るはずなのに、「たとえお母さんにでも言えば、ただではおかない。そうしたら命はないよ。」と言っていることから、雪女の方はミノキチのみならず、その母親のことも知っている様子である。ということは、この時の雪嵐吹雪も、雪女によって引き起こされたものだということが分かる。それが可能なのは、川のこちら側の今ミノキチがいる世界は雪女の世界だからである。

しかし、恋心を如何ともしがたく、ミノキチとの人間的なつながりを求めて、今度は雪女の方が人間界へとやって来る。翌年の冬にオユキとして雪女が再びミノキチの前に姿を現すのである。

翌年の冬のとある夕べ、ミノキチは帰りしなに、たまたま同じ道を急ぐ娘と一緒にになった。女はすらりとした背の高い、大変美しい顔立で、ミノキチの挨拶にまるで小鳥の歌うような心地よい声で挨拶を返した。ミノキチは女と並んだ。そして二人は言葉を交わし始めた。娘はオユキといった。両親を先ごろ亡くして、貧しいながら遠縁がいる江戸へ出る途中だという。女中の口でも見つけてもらうつもりだと言った。ミノキチはじきにこの見知らぬ娘の魅力に惹かれた。見れば見るほど器量よしに思われる。もう誰か相手はいるのか、と尋ねると、女は笑って、そんなお方はまだおりません、と答えた。そして今度は女がミノキチに、もう奥さんはおありか、お約束はおありか、と尋ねた。ミノキチは、自分は母と二人暮らしで、まだ年も若いから嫁の話は考えたことはない、と言った。(略)そして当然の成り行きながらついに江戸へ行かずじまいになった。オユキはその家に嫁となってとどまったのである。(82-83)

オユキはひとりで登場し、江戸の遠い親戚以外には身内がないことなど、ひとりであることを強調しているように見える。オユキはほっそりとして、見目麗しく、声も小鳥のように素晴らしいので、若いミノキチはすぐに魅了されてしまい、ついには結婚することになる。立ち居振る舞いも申し分なく、恥じらう様子も初々しく女性的で、典型的な若い娘になりきっている。もちろん、これは雪女の策略なのである。

実際に結婚し、子供も10人できて幸せな生活を送り、近所の人たちもお雪の素晴らしさを認めてはいたが、自分たちとはもともと違うと感じている。農家の嫁は大体早く年を取るのに、お雪は10人の子どもを産んだ後でさえ、村に来た当初とほとんど変わらないからである。しかし、普通とは少し違うと不思議に思われていたにもかかわらず、オユキの魅力がそれらの疑念を振り払うほどに、素晴らしかったということなのである。つまり、オユキは一生懸命にミノキチに気に入られようと、素晴らしい人間になろうと努めていたことになる。その甲斐あって、ミノキチや子どもたちとともに、オユキは本当に幸せな生活を送ることができていた。しかし、その幸せにも終わりが訪れる。予定されていたことではあるが、ミノキチが雪女から禁止されていた秘密を暴露してしまうのである。ミノキチにとっては、オユキに秘密を暴露するという事は、親密度の表れであり、幸福な状態を反映している。オユキを素晴らしい妻だと認めているからこそ、秘密を共有しようとするのである。そうすることによって、さらにミノキチは夫婦の絆を強めようとしたのである。秘密を共有するという事は、ある意味、共犯関係になることである。オユキと秘密を共有することによって、ミノキチの心に重くのしかかっていた雪女との約束という荷を軽くすることができるはずであった。それほどまでに、雪女との約束は強固であった。

ところが、それはミノキチには許されることではなく、雪女は約束通りにミノキチを殺さな

ければならなくなる。その最後の場面は次のように描写される。

オユキはいきなり縫物を放り出すと、すっと立ちあがり、座っているミノキチの上に身をかがめて、その顔に鋭い声を浴びせた、――。

「あれは、私、この私、このオユキでした。一言でも喋ったら命はない、と言ってあったはず。…あそこに寝ている子供たちのことがなければ、この瞬間にもあなたの命を奪ったものを。今となっては子供たちのことはよくよく面倒を見てください。子供たちをいじめでもしたら、容赦はしませぬ」

そう甲高い声で叫ぶうちにも、オユキの声は、風の響きのごとく細くなり、女は白く輝く霧のようになって天井へ舞いあがったかと思うと、震えつつ煙出しの穴から外へ消え、それきり二度と見ることはできなかった。(85)

そもそも、雪女と人間の間の幸福は長続きしてはいけない。異種なもの同士の結婚生活は上手く行くはずがなく、必ず破綻する。おそらくそれを雪女も知っていたのだろうが、あるいは、それを知っていたからこそ、雪女はミノキチに念を押したはずであった。しかし、雪女の幸せとミノキチの幸せは相容れないものであったということである。

また、雪女も禁を破って、ミノキチとしばらくの間、幸せな結婚生活を送る。10人の子供を産んでもオユキは年を取ることがなかったということであるならば、おそらく今後も年を取ることはいないのであろう。そうすると、ミノキチと子供たちだけがどんどん年を取り、ついには死んでいくことになる。つまり、オユキは大好きな夫や子供たちを看取らなければならなくなるのである。年を取らないオユキにとって、それはつらいことに違いない。したがって、ここでミノキチが秘密を暴露することは、ある意味、好都合なことであったと言える。子供たちの安全を確保したあとで、自分がいなくなれば、自分が犠牲になれば問題は解決するのである。そこで、最後の場面にあるように、雪女はミノキチに子供たちの面倒をよく見ることを約束させ、輝く真っ白な霧になって煙用の穴から外へ出て行く。そして、二度と彼女は見られることはなかった、つまり、二度と出てこなかった。

やはり、雪女がいなくなることによって、母親がいなくなることによって、読み手の心は子どもたちにも向けられることになる。その結果、ミノキチは人間のままで悲しみを抱えて生きていくことになり、そして、子どもたちも母親なしで成長していかなければならないことになり、人間の情感に訴える悲劇として完成される。今後の一家の生活は母親なしの辛い生活になることが容易に想像される。特に、10人の子どもたちにとっては、さらに辛いものになる。この子どもたちの艱難辛苦を考えるにつけ、読み手・聞き手の心に慈悲心が惹起され、この物語が強い印象を与え、濃い残像を残すことになる。そのことによって、この物語の価値が非常に高まる訳である。やはり、オユキとミノキチの結婚は破綻しなければならない運命にあったの

である。

この最後の雪女の消失の場面は何を意味しているのでしょうか。雪女は死んでしまったのか。白く輝く霧のようになったということから判断すると、水蒸気になったということになる。幸せで温かいミノキチの家の中では、雪女は生存できない。オユキでいるうちは人間と同じように暮らすこともできたが、秘密の暴露によってオユキは雪女に戻ってしまい、霧になったのだ。それでも、当然のことながら、霧は寒くなると雪になる。したがって、霧になって消えた雪女も、冬になると再び雪女になるであろう。しかし、このミノキチとの出来事以来、雪女は二度と人間とのかかわりを持つことはなかったと思われる。寒くないときは霧の状態で、また、寒いときは雪になって、子供たちを見守り続けたのだ。

では、この雪女の状況をハーンに当てはめてみることはできないでしょうか。これまでの「雪女」の分析から、雪女はハーンであった、と言えるかもしれない。池田雅之は『『怪談』は、…内面の告白、魂の遍歴をしるす自伝的要素を持つ作品』（90）と述べている。ヨーロッパ文化の世界から日本文化というこれまでに経験したことのない世界へと移り住んできた状況は、人間世界に移り住んだ雪女と重なるのではなかろうか。雪女と同じように白い人であるハーンは、異文化を持つ、いわば異類ともいえる日本人の小泉節子と結婚した。結婚に至るまでにも多くの困難があったが、生活していくうえで、二人の間には、さらに数多くの困難があったはずである。そのような状況の中で、ハーンは雪女が感じていたのと同じような孤独、孤立感を感じていたのではなかろうか。だからこそ、いつ壊れるともわからない生活の中で、この雪女の話に強い関心を持ったのだと思われる。つまり、雪女はハーンの分身でもある。また、雪女とオユキの「ユキ」は、ハーンの説明にある通り(This name, signifying “Snow,” is no uncommon.)「雪」であり、それは「セツ」とも読めることから、もうひとりの「セツ」である小泉節子との連想も強く働いたに違いない。

2. 「耳なし芳一」について

雪女がハーンの分身であるとする、芳一はどうであろうか。小泉節子の「思ひ出の記」によると、ハーンは芳一ごっこを気に入っていた（46）ようである。それであるならば、芳一もまたハーンの分身と言えるのではないだろうか。

「耳なし芳一」については西成彦の『ラフカディオ・ハーンの耳』（1998）で多方面からの分析がなされている。また、拙論「成功物語としての『耳なし芳一』」（2012）でも考察を試みた。本稿では、重複する部分もあるが、特に、芳一の「ひとりであること」に焦点を当てて考えてみたい。

この物語の芳一に関する部分の出だしは次のようになっている。

何百年か前に赤間関には芳一という名の盲人が住んでいた。琵琶を弾いて語るのが上手なことで名を知られた。幼い時から芸を仕込まれたので、まだ若者のうちに師匠たちを凌駕してしまったのだという。琵琶法師として身を立てたが、源平の物語を語るのが特に上手で、芳一が壇ノ浦の戦の段を語る様子は、「鬼神ヲモ泣カシム」と言われたほどである。

琵琶法師として身を立てようとした当初、芳一は貧乏の辛さを身にしみて味わった。が、しかし自分を助けてくれる良き人に恵まれたのである。阿弥陀寺の和尚は詩歌管弦を好み、芳一をしばしば寺に招いては琵琶にあわせて平家を語ることを所望した。その若者の素晴らしい芸に感心した和尚はやがて芳一に寺に住み込むようすすめた。芳一は有り難くその申出でをお受けした。そして寺の中に一間を与えられ、食と住を供される代わりに、ほかに用のない時に限って、時々夕刻に琵琶を弾いて和尚をお慰め申すこととなった。(14)

この芳一の生い立ちについて述べた部分からも分かるように、阿弥陀寺の和尚がパトロンになって、芳一を庇護することになる。西も指摘しているように、当時の寺の和尚というのは知識階級であり、教養もあり、技芸の保護者でもあった(178)。そのお陰で芳一は琵琶を弾くだけで、衣食住が保証されることになったのである。ほかの情報としては、芳一は目が見えないこと、貧乏の辛さを知っていること、なども挙げられている。また、芳一には家族がないこと、そして、おそらく身寄りのない孤児であったことも暗示されている。それらすべての苦勞を琵琶の弾き語りで乗り越えてきたのである。

ハーンも同じような立場にあった。英語を話せること、英語を教えることによって、高い報酬を得ることができ、結果としてそれで衣食住が賄われたのである。琵琶の弾き語りのできる芳一が和尚という庇護者を見出したのと同じように、英語ができるハーンは、日本あるいは日本政府という庇護者を獲得したのだと言える。近代化を推し進める当時の日本においては、英語を話せる、教えられるというのは素晴らしい能力だった。見方を変えると、琵琶が芳一を発見したように、日本で必要とされる英語がハーンを発見したとも考えることができる。次に、具体的に平家の亡霊が芳一のところにやってくる場面を見てみたい。この場面でも芳一は「ひとり」であることが強調されている。

ある夏の夜、和尚はなくなった檀家の家へ法事に呼ばれた。小僧を連れて行ったので寺には芳一がひとり残された。暑い夜で盲目の芳一は寝間の前の縁側で涼を取っていた。縁側は阿弥陀寺の裏の小さな庭に面していた。そこで芳一は和尚の帰りを待ちながら、琵琶を弾いて寂しさを紛らわしていた。真夜中も過ぎたが、和尚はまだ戻らない。しかし寝間の内に入るにはまだあまりに暑かったので、芳一は外に残っていた。ついに裏門から近づいてくる足

音が聞こえた。誰かが庭を横切って、縁側をさしてやって来る。そして芳一に面と向かって立ち止まった――が和尚ではない。突然、遠慮会釈もなく、侍が下のものを呼びつけるように、低い声が盲人の名前を呼んだ。

「芳一」

芳一は仰天してしまって、即座には返事もできなかった。するとその声は再び、厳しい命令口調で、

「芳一」

と呼んだ。

「はい」と盲目の芳一は、相手の声に含まれた脅しにおびえて答えた、

「私は目が見えませぬ。――私をお呼びの方はどなた様でございますか」(15)

「ひとり残された」、「寂しさを紛らわしていた」など、芳一の孤独感が見て取れる場面である。この場面は、「雪女」の吹雪の場面とは正反対に、暑い夏の夜に設定されている。芳一は暑い夜をしのぐために、廊下に出て、琵琶を弾いて寂しさを紛らわそうとしていた。

また、「雪女」では川が人間界と霊界の境界であったように、この「耳なし芳一」の物語世界では、阿弥陀寺の廊下が人間の世界と亡霊の世界との境界線の役割を果たしていると考えられる。図らずも、その境界線上に芳一は位置してしまったのである。阿弥陀寺という通常の家とは異なる空間の中に。「雪女」でも境界線沿いで雪女が登場したように、「耳なし芳一」ではこの廊下に平家の亡霊がやって来る。そして、平家の亡霊たちのために、「平家物語」を謡うことになるのである。「雪女」では雪女が人間界に入ってきたのに対し、「耳なし芳一」では芳一のほうが亡霊の世界に入っていくことになる。

次の引用場面は、芳一の奇行に和尚が気づいて、芳一の体に般若心経を書く場面である。般若心経には霊力があり、芳一を守ってくれるはずなのである。和尚は芳一に亡霊に惑わされないうようにと指示を与えて出かけて行くのだが、またしても、芳一をひとりにしてしまった。さらに問題なのは、和尚がいつものように「廊下で待て」と指示したことと、「耳に」般若心境を書き忘れたことである。その結果、亡霊は廊下で耳を見つけて、それをむしり取って持って行き、芳一は耳を失くしてしまう。

日が暮れる前に和尚と小僧は芳一を裸にすると、筆でもって二人は芳一の胸や背や顔や首や手や足や足の裏や、いたるところに般若心経というお経の文句を書き付けた。それが済んだ時、和尚は芳一にこう言い聞かせた。

「今晚、私が出かけたら、お前は縁側に座ってじっと待っていていなさい。呼ばれるだろうが、何事が起ころうとも返事してはいけない。動いてはならない。何も言わずに黙って瞑想する

ように座っていなさい。(略)」(23)

結果として芳一は耳を失くしてしまう。西は、失くすのは耳殻のみであり、逆に耳の役割が増大すると(186)と指摘している。その通りではある。しかしまた、別の面について考えなければならないだろう。それは耳の持つ象徴性である。

芳一は平家物語、つまり、平家の歴史を伝えようとするのであるが、一般人は謡、歌謡としての素晴らしさは認めるものの、その歴史性については、もはや理解できない状態にあったのではなかろうか。それは、聞こえていても、理解できていないということである。

ハーンも民話や伝承という歴史の魅力、価値の持つ重要性について語り続けるのであるが、近代化を推し進める当時の日本と日本人には理解してもらえなかったのである。当時の日本にとっては、古いものは価値がないものだった。古い伝統の残っている松江でさえ、英語が教えられていたのである。古い日本を消滅させる手助けとなってしまう英語教師という仕事は、ハーン自身の中で矛盾していたに違いない。

さて、芳一は最終的にはその技量のおかげで、また、耳をなくしたからこそ、その逸話で有名になり、経済的に成功を収める。つまり、芳一は、ひとりであることによって耳をむしり取られ、耳を失くすことによって、比喩的な意味で、亡霊の声を聴けないようになり、亡霊の世界から抜け出すことができ、人間の世界で活躍できるようになったのである。ハーンの場合は、**Lafcadio Hearn** という英語の名前を失くすことによって、名前を捨てることによって、かつまた、「小泉八雲」という新しい名前を獲得することによって、富と名声を獲得することができたと言えよう。

3. まとめ

本論考では、『怪談』の中の二つの作品「雪女」と「耳なし芳一」を取り上げ、ハーンがなぜそれらの作品に関心があったのかについて考察した。キーワードとして「ひとりであること」に注目し、両作品とハーンとの共通点について分析した。その結果分かったことは、雪女と芳一の苦しみ、孤独感や孤立感は、ハーンのそれと相通じるものがあるということである。ハーンは、日本での生活の中で感じた「ひとりであること」を雪女や芳一の中に見出し、自分自身を重ねて見ていたのではないだろうか。

注

「雪女」と「耳なし芳一」の日本語訳は講談社学術文庫版の平川祐弘訳を参考にしたが、一部変更した部分もある。また、「雪女」の登場人物名は、漢字を使用すると登場人物の特性を表す可能性があるため、カタカナ表記にした。

引用文献

Lafcadio Hearn, Kwaidan (Boston: Houghton Mifflin, 1904)

池田志郎 「成功物語としての『耳なし芳一』」、坂本昌樹他（編）『ハーンのまなざし』、熊本出版文化会館、2012年、33-54頁。

池田雅之 『100分 de 名著 小泉八雲『日本の面影』』、NHK出版、2015年。

小泉節子 「思ひ出の記」、平川祐弘（編）『小泉八雲 回想と研究』、講談社学術文庫、1994年。

小泉八雲 『怪談・奇談』平川祐弘（編）、講談社学術文庫、2004年。

西成彦 『ラフカディオ・ハーンの耳』岩波書店、1998年。